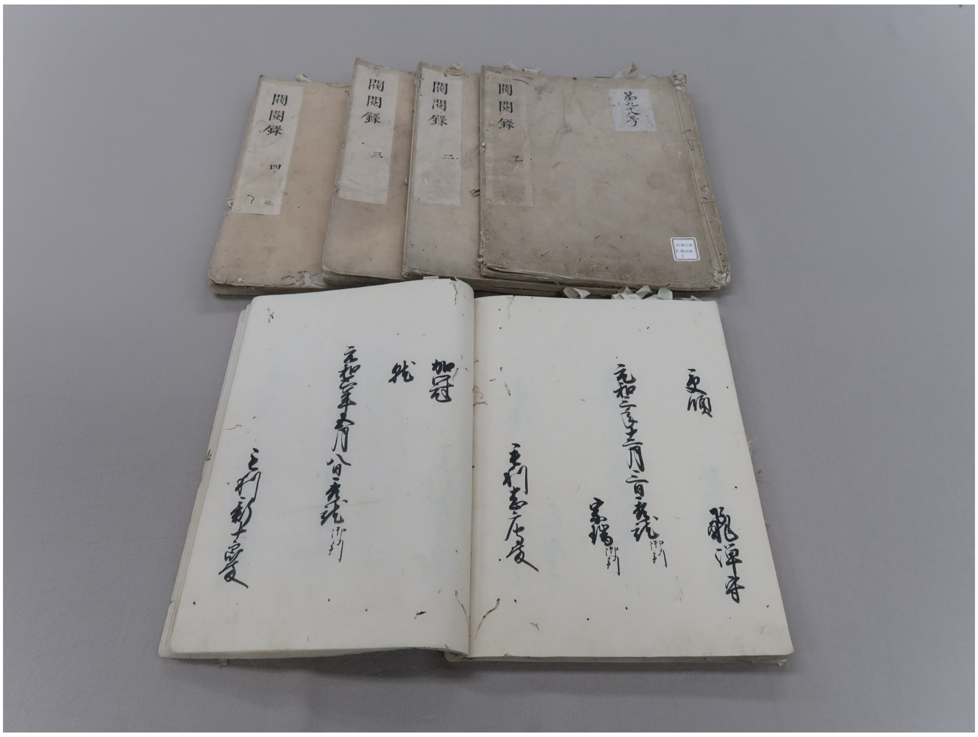
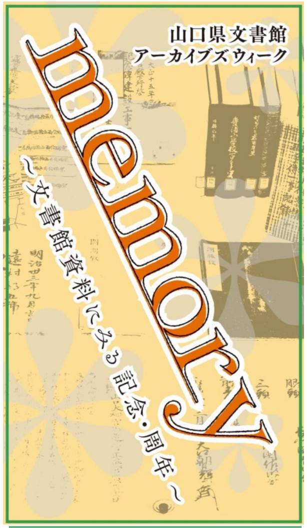




2

閥閲録（県庁伝来旧藩記録　閥閲録）

あれから ❷

完成から300年「閥閲録」と永田瀬兵衛

《『萩藩閥閲録』の刊行》

山口県文書館は、昭和41～46年度(1966～71)に『萩藩閥閲録』4巻を刊行しました。5代萩藩主毛利吉元の命により藩士永田瀬兵衛(政純)が編纂し、享保11年(1726)12月に完成させた「閥閲録」204冊を翻刻したものです。令和7年(2025)は「閥閲録」完成から300年になります。

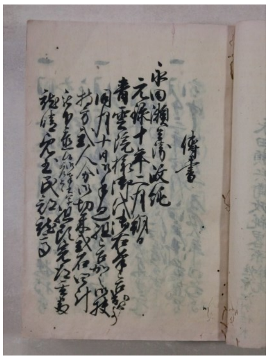
《閥閲録とは》

閥閲録には、萩藩士を中心に、足軽・中間、陪臣、百姓・町人ら1124家が所蔵していた膨大な古文書が収録されています。文書は家ごとにまとめられ、歴代当主、その死去年月、年齢からなる略譜も掲載されます。収録文書は鎌倉期から藩政前期(元禄・享保期)に及びますが、量的に多いのは毛利元就から輝元・秀就時代(戦国～藩政初期)のものです。毛利家以外の発給文書も数多く、また、現在では原本が失われ、本書でしか確認できない文書も多数あります。このため『萩藩閥閲録』は、貴重な史料集として研究者から高い評価を得ています。

《閥閲録の編纂過程》

閥閲録の編纂が命じられたのは享保5年6月でした。7月7日、藩は家臣たちへ、所蔵する古文書の写しを提出するよう通達します。毛利家の発給文書はもちろん、他家発給文書でも毛利家と関係がありそうなものは提出せよといい、また文書が無くとも、家の確かな由緒が伝わっていればそれを書き上げ提出するようとも指示しています(「御意口上控」毛利家文庫38御意控4(44の7))。

8月末、藩は家臣らに所蔵文書の写しと原文書を萩城に持参するよう命じます(「諸触書抜」同9諸省51(5の2))。永田が校合を行うためです。提出日は階級や組ごとに定められましたが、それは9、10月の2ヶ月に集中しています。永田の校合作業は急ピッチで行われました。短期間に多くの家の文書をチェックせざるを得ず、期間の短さは正確さを期す上で支障となったか



永田瀬兵衛　譜録

永田瀬兵衛が寛保元年(1741)に藩へ提出した「譜録」は毛利家文庫には残っていませんが、明治前期に原本から書き写したものが県庁伝来旧藩記録　譜録188にあります。永田の経歴、享保3年の帰国後、彼が藩主の命でどのような「旧記御用」を務めたのかが、この「譜録」からよくわかります。

もしれません。また家臣たちも、写し提出まで時間的猶予がなく、結果、家内の調査が十分にできず、収録漏れ文書があるまま写しを提出した者もいたはずです。

続いて藩は、享保7年にも提出を促す通達を出します(二十八冊御書付(同40法令135))。この通達では、対象文書が5年時よりも具体的に示されています。先祖の死去年月日などの書上もこの時指示された内容です。

永田は、写しと原本の校合作業後、書式の統一作業などを行い、浄書本の編纂を進めました。享保11年12月、完成した204冊の冊子は「閥閲録」と命名され、春・夏・秋・冬の4箱に入れて萩城の御宝蔵に納められました。12月15日、その功により永田は銀子3枚を下賜されています(同31小々控8)。

《永田瀬兵衛政純》

永田瀬兵衛は、寛文11年(1671)、藩医永田家の3男として萩に生まれ、宝暦4年(1754)84才で亡くなりました。長命の人でした。家業は継がず、藩士として別家を立て、元禄13年(1700)以降、48才まで江戸藩邸に長く勤務し、御用所祐筆、矢倉方(江戸藩邸の財政担当者)などを務めました。閥閲録編纂を命じられたのは帰国後50才の時です。永田はその人生前半期、藩の実務役人として活躍した人でした。

享保3年8月、48才で江戸から帰国した永田は、藩主吉元から「御什書御用」を命じられます。毛利家伝来の古文書を分類、整理し、必要であれば補修し、その上で巻子に仕立てる作業でした(160軸)。『大日本古文書』掲載の毛利家文書(毛利博物館蔵)がこれにあたります。作業は元文2年(1737)頃まで続き、終了後も、御什書註書（文書ごとに注釈を付したもの）の編纂や御什書写の作成を命じられています。

永田は「御什書御用」と並行して、閥閲録をはじめ、毛利家系図の決定版・江氏家譜(同3公統17)、元就の一代軍記・新載軍記(同14軍記2・3)、毛利家祖先土師宿祢より元就までの卒年月を考証した御系図弁疑(同3公統32)などの編纂を命じられました。膨大な古文書・記録をよく調べ、萩藩、毛利家の歴史に詳しい人物として信頼された永田は、歴史学者、「史臣」(広田暢久「長州藩史臣永田瀬兵衛と『萩藩閥閲録編纂』」)と呼ぶに相応しい存在でした。

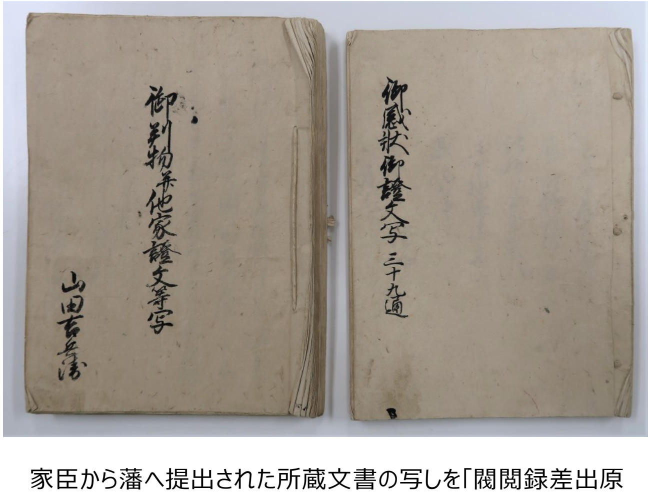
一方で永田は、初代秀就以降の女房奉書、将軍の御内書、幕府老中奉書、および萩城御宝蔵内にあった2櫃の文書、ならびに萩城天守に保存されていた14櫃の文書などの整理も担当しています。毛利家、藩に残る過去の文書を整理しその利用の便を図る、いわば「アーキビスト」としての仕事も担いました。そのような彼の仕事の一面は、次の世代、藩士柿並市右衛門へと引き継がれることになります。

《閥閲録の編纂理由》

閥閲録はなぜ編纂されたのでしょう。従来、藩主吉元による学問・文化興隆策の一環と位置付けられたり(『萩藩閥閲録』解題)、「閥閲録」編纂を通じ、「家臣に毛利氏との主従関係を再確認させ、藩主吉元に対する忠誠心を喚起した」との評価があります(『山口県の教育史』)。その編纂自体に政治的な意図をみる見方です。一方、御什書整理や江氏家譜編纂のための参考資料として編纂されたとする理解があります(広田暢久「長州藩編纂事業史(其の五)」)。

永田は吉元、宗広、重就3代の藩主に仕えました。吉元・重就は支藩長府藩主から毛利宗家を継ぎ萩藩主となりました(宗広は吉元嫡男)。この3人の藩主は、長府藩出身という出自ゆえに、逆に、元就以降の毛利家、代々の家臣、藩内の寺社、萩藩政の動き、本支藩関係などにつき、その歴史を正確に把握したい思いを歴代藩主より強くもっていたはずです。「江氏家譜」「新載軍記」「御系図弁疑」などはそうした意図から編纂を命じたものです。

閥閲録編纂は、それ自体に政治的意図があったというより、萩藩・毛利宗家が、過去の歴史を正確に把握し、事実認定するための史料、歴史的な情報を広く集めることに目的があったと理解できそうです。毛利家の家文書の整理が進められたこと、さらには閥閲録の後、藩が家臣に譜録提出を何度も求めたのも、おなじ意図によると考えられるのです。



家臣から藩へ提出された所蔵文書の写しを「閥閲録差出原本」といい、その一部が当館に伝来しています。また、元萩藩士の家文書に提出分の控が残っている場合があります。上の写真は寄組・山田家文書に残る例です。これらと見比べることで、「閥閲録」編纂過程の一端がみえてくるでしょう。

右：享保5年9月4日提出(山田家文書9)

左：享保7年8月20日提出(山田家文書218)